大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

『金瓶梅』にみえる伝統思想と進歩思想

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 顧, 春芳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004598

『金瓶梅』にみえる伝統思想と進歩思想

顧　春芳

一、はじめに

『金瓶梅』という小説は、中国ではじめての長編世情小説とよばれる。明中葉の富商西門慶という人物の一族の日常生活を描いている。

従来中国で、『金瓶梅』の思想に対する言及は、充分には行なわれなかったように見える。ようやく近年、『金瓶梅』の思想に対する研究は見るべき成果を挙げつつあるといえるが、問題とすべきことがらはまだ多く残されている。

その中で、もっとも注目されるのは、多くの学者が、『金瓶梅』の中には、欲望を追求するという明末期の進歩思想を肯定すると同時に、儒教と仏教の伝統道徳を重視し、これをもって、進歩の欲望思想を批判したと指摘することである。

この意見の代表者として宋克夫は、「人欲の正視と人生の困惑」の中で、次のように言っている。(1)

『金瓶梅』が生まれた明の中葉では、商品経済の発展によって、人びとの価値観に大きな変化が起った。時代の風習の表現として、金貨財富を追求することや、繁華な生活を享受することや、色欲と情欲をほしいままにすることなどが、人々の価値観を構成した。『金瓶梅』の作者は、これらの新しい価値観によって伝統的な価値観の体系に対する攻撃を客観的に表現する一方で、倫理意識、宗教意識と生命意識をもって、世間の風習を匡正することをのぞんでいる。したがって、最終的には、作者自身が矛盾と困惑の境地に陥ることになってしまった。

また、もう一人の学者支沖は、『金瓶梅』の思想の欠点について、次のように述べている。(2)

表現の一は、「因果輪廻」という仏教の小乗思想が『金瓶梅』の書中をつらぬきとおしていることである。あらゆる圧迫、搾取、謀殺によって結ばれた恨みを宿命のせいにしている。この恨みの解消は仏法しかない。これは反動統治に合致した宗教的阿片であり、書中の重要な思想毒素である。…

ここで、宋氏と支氏はともに、『金瓶梅』の作者は明末期の「個性解放」という民主主義思想の影響を受けて、明の中葉の官吏兼商人西門慶の一家族の生活の描写を通して、欲望思想を提唱すると同時に、儒教と仏教の伝統道徳思想によって、好色と好貨の欲望思想を批判した。これらの表現は、あくまでも作者自身の思想の限界であることは言うまでもない。作者自身も矛盾と困惑に陥っているということが指摘された。

小稿は、宋氏と支氏の意見に反論を提したい。確かに、『金瓶梅』の中では、明末期の欲望、特に性欲の快楽を追求することを肯定する一方で、人の行為と言論を評価する時に、従来の儒教と仏教の伝統道徳に基づいている。しかし、これは作者自身が矛盾と困惑に陥っているとはいえないと考えられる。『金瓶梅』の中では、欲望の追求という民主主義の進歩思想と従来の儒仏の道徳思想が自然に調和し、共存していると思われる。ここで、注意すべきは、明の時代には、儒教と仏教の伝統道徳思想も千年以上にわたって、中国の士大夫から市民階層にまで深く浸透しているということである。人々が新しい思想を吸収するときも、一般的には、伝統的な倫理道徳を排除しない。また、伝統の倫理道徳思想によって、人々の行動と言論を批評することが多い。『金瓶梅』の中では、いくら儒仏の思想をもって、人々を説得しても、主人公達のほしいままな放蕩生活は時代の新思想として、人々の心を動かした。このようにして、欲望を追求するという進歩思想と伝統的な倫理道徳思想は自然に調和し、共存してきた。

本稿は、『金瓶梅』が生み出された明の中葉から末期にかけての哲学思潮、社会環境、文学思想と明の知識人の考えとの関連を考察した上で、『金瓶梅』の中には、欲望を追求するという進歩思想と儒教と仏教の伝統道徳思想が自然に調和し、共存している点を論じようとするものである。

二、『金瓶梅』の時代背景について

『金瓶梅』は、明末期の「世情小説」として、その時代の思想と気風が深く関わっていると思われる。本章では、主に明の中葉以降の時代的特徴を考察して、『金瓶梅』の作者の思想の一側面を論じてみたい。

『金瓶梅』が生まれた時代は、明末期である。この時代は商業が

非常に繁栄した。商人達は裕福な生活をし、また、商人の社会的地位も高まってきた。これに反して儒教の伝統倫理道徳の代表である程朱理学の指導的地位が動揺し、新しい社会思想が生み出された。

思想家の王守仁（一四七二～一五二八）は、「良知はただ是非の心のみ」[3]という認識論を提出した。この理論は、従来の聖人の言行によって、是と非を判断する基準に反対し、個人も是非を判断する能力を持つということを主張した。

吉川幸次郎は、明代の文学と思想の関わりについて、次のように述べている。[4]

この時に王陽明の儒学が流行したことはそのことと無関係ではない。王陽明の儒学は主観主義であり、万物はみな己れの心の中に備わっている。さればこそ、己れは万物を認識することができるのであり、心さえ純粋にすれば立派な人間になれるというのである。こうした陽明の学問が流行したことは、この時代における直情径行の尊重の別の現われであったと言ってよい。李卓吾もそうした人間の一人であった。

ここで、注意したいのは、当時、王陽明の主観主義的な儒学の影響のもとで、世の中で異端的な思想も受容されはじめたことである。李卓吾はその異端思想家の代表的な一人であったということである。

李卓吾（一五二七～一六〇二）は王陽明に傾倒し、自己の判断によって、新しい価値観をつくり出した。彼は「答鄧明府書」の中で、次のように言っている。[5]

どんな浅近な言葉でも真聖人の言でないものはない。そうだとすれば天下に一人として真聖人でないものはないことは明らかだ。……衆人が毎日行なっているところを揚げれば、以下のことに尽きよう。貨を好むこと、色を好むこと、学問に勤めること、進んで取ること、多く金宝を積むこと、多く田宅を買って子孫のためにはかること、博く風水を求めて子孫の幸福を為すこと。

ここで李卓吾は、学問の進取と官界を歩むことを栄誉とし、好貨、好色のことを恥じるという、従来の儒教の価値観を徹底的に否定しようとしたのである。

ここでみられるように、好貨、好色の欲望をもつ人間も「真聖人」の資格を有しているとするのは李卓吾の一つの考え方である。また、彼は「答鄧石陽書」の中で、次のように述べている。[6]

衣服を着て飯を食うことは人間の基本道理である。衣服を着て飯を食うことを除いては人間の価値はなくなる。世間の何もかもがみな衣と飯とに関係したことがらばかりである。

ここで、李卓吾は、儒家がもっとも重視した「出でては則ち公卿に事え、入りては則ち父兄に事う」[7]、「身を修め、家を斉へ、国を

治め、天下を平らかにす」[8]ることを基盤とする倫理道徳を徹底的に否定し、「穿衣喫飯、即ち是れ人倫の物理」と唱えているのである。中国では、道徳の本性こそが人間の本質であり、生存欲や私的欲望などをあからさまに表面に出すのは人を禽獣なみにするものだ、という考え方が一般的だった。そうした常識に、李卓吾は大胆に挑み、日常生活の中においてこそ人間の真価があることをはっきりと見出したのである。

上述したように、李卓吾の思想の中核である人間の欲望と、朱熹と二程が提唱した「天理」は実は同等のものである。李卓吾は、人の欲望、食欲、情欲、性欲などを充分に肯定したと考えられる。

この思想の影響によって、従来は好貨、好色に対してややもすれば否定的、隠蔽的であった士大夫においても、それまでになく寛容な開放的態度をとらしめるに至った。

さらに、当時の士大夫の中には、憚ることなく自らの好貨、好色について語る者もいた。例えば、文学家の張岱は「自為墓誌銘」の中で、次のように言っている。[9]

蜀人、張岱は、号は陶庵である。わかい時に貴族の子弟として、大変派手好きだった。豪華な住宅を好み、美女を好み、わかい美男子を好み、派手な衣裳を好み、美食を好み、飾り灯籠をかけている夜景を好み、花火を好み、歌舞、演劇を好み、楽器の演奏を好み、骨董品を好み、花鳥を好み、さらにお茶にふけり、酒をたしなんだ…。

ここで、張岱は自己の好みを列挙した、その内容は「極愛繁華、好精舎、好美女、……好美食」などである。墓誌銘という文章は、死者の事跡、徳行などを記録して、後世に伝えるものである。儒教の「忠君、事父」は士大夫にとって、きわめて重要な徳目である。中国の文人はみな表向き儒教徒である。儒教徒である以上、完全な禁欲主義ではないとしても、欲望は抑制されねばならず、好色、好美食などは決して美徳とはみなされなかった。しかし、張岱はわざわざ墓誌銘のなかで自分は放縦淫靡な生活が好きだということを宣言した。他の時代ならば、士大夫の墓誌銘で、このようなことを書くのは、礼を失したことであり、またこれは士大夫の節操に対するゆゆしき冒瀆として一顧だにされなかったにちがいない。

また、明の有名な文学者袁宏道（一五六八～一六一〇）は「龔惟長先生」の中で、快楽主義を提唱している。[10]袁宏道の快楽説によれば、人生の最高の楽しみは、美味しいものを食べること、美しい音楽を鑑賞すること、美女たちと一緒に遊ぶことである。士として、もしこんな生き方ができたら、生きているうちに恥じることがないし、死んだのちも、このようなすてきな生き方がいつまでも伝えられる。ここで、袁宏道は儒教の立身出世などには一切ふれない。た

だ、感覚的快楽を享受する重要性を説いている。これは当時の世の指導者たるべき文人士大夫の精神風景といえよう。

士大夫たちはみんな欲望の中に沈潜している。これは明代全体の社会環境と関わっていると思われる。当時、高官たちから一般の庶民まで、みな美食、好貨、好色はごく自然なことと認識されていた。張翰は『松窓夢語』の中で、明代の社会気風に関して、次のように言っている。[11]

世俗は欲を縦にするを以て尚と為す。人情は放蕩を以て快しと為す。

ここで、張翰は明代の世の中の人々がみんな欲望を追求して、放埒な生活をしているという生き方を指摘した。これは明代の普通の人々の生き方と考えられる。

この時代の文学も社会思想と同じく欲望に満ち溢れている人々の生活を描写している。これらの文学作品は数多い。蘭陵笑笑生の『金瓶梅』、馮夢龍の『三言』、凌濛初の『二拍』、湯顕祖の『牡丹亭』などはこの時代の代表的作品といわれる。

これらの作品の作者は皆自覚的に好色と好貨という欲望思想を提唱した。例えば、『金瓶梅』の作者は『金瓶梅』の第一回の中で、次のように書いている。[12]

いったい、情は本体、色ははたらきですから、色は目にあらわれ情は心にやどる、情と色とは相生相剋、心と目とはなかま同士という関係。昔から今まで、聖人君子といえどもこれを忘れるわけにはいかない。

ここで、『金瓶梅』の作者は、人間の情欲はごく自然のものであり、古今の聖人たちも同じだと指摘した。

また、袁宏道は「徳山麈談」の中で、次のように述べている。[13]

たちまち美色を見て心を迷わす、たちまち金銀を見て心を動かす。此れ亦た矯強に出づるに非ざるなり。

袁宏道によれば、人間として、情欲をもち貪欲であることは欠点ではない。つまり、人間として情欲をもち貪欲であることは正常な人間だという。このような考え方が生まれたことが明の時代の特徴ではなかろうか。

『金瓶梅』の作者は、この時代の気風にあわせて、特に好貨と好色という欲望を肯定する考えを提唱している。『金瓶梅』では、商人であった西門慶という男が、薬屋からはじまって、商売の範囲を手広く拡大し、金の力によって、時の権力者に媚び入り、官職を獲得した。その後は、その地位・権勢を利用して、いっそう、金と色の欲望を逞しくする。…

『金瓶梅』の内容からみれば、好貨、好色の思想こそが作品の中心的主題である。

以上、『金瓶梅』登場の時代背景について考察してきた。ここで、明らかになった点をまとめれば、次の通りである。『金瓶梅』の作者は明中葉の富商西門慶の一族の生活を描いた。書中人物の考え方の主要な傾向は好貨、好色だと思われる。『金瓶梅』の作者は明中葉以降の欲望を追求するという進歩思想を提唱したといえよう。

三、『金瓶梅』中の人物の言論について

社会思潮として好色、好貨の気風が存在し、世の中に放縦、贅沢な生活を送る者が多く現れた。しかし、欲望を追求することが明の気風になる一方で、庶民たちの意識の中には、儒教の倫理道徳と仏教の因果応報、輪廻転生の思想も根づよかった。この時代の文学作品も儒教と仏教の影響を受けて、儒教の倫理道徳と仏教の因果応報と輪廻転生の説を利用して、放縦淫靡な生活をしている人々を警告した。『金瓶梅』も例外ではない。

この章は、まず『金瓶梅』の中の登場人物の言論について論述してみたい。

『金瓶梅』の主人公、西門慶は、成りあがり者である。道楽事はなんでも一通りできるが、教養は微塵もない。そんな男が、『金瓶梅』の第六十九回の中で、昔高官であった王招宣の孫王三官が毎日女遊びばかりすることに対して、次のように言っている。[14]

あの家も運が悪いや、あんな不肖の息子を出すなんて。先祖は由緒正しいし、招宣にまでなり、あの男も折角武官候補生になりながら、試験勉強もしないし……。昼も夜も、ただあのゴロツキどもと一緒に廓で女遊び、女房の髪飾りまで持ち出して金にかえる始末だ。とって二十歳にもならない鼻たれ小僧のくせにね。てんでなっとらん。

ここで、西門慶は儒教の立身出世思想に基いて、王三官の非礼の行動を批判した。西門慶は決して儒者とはいえない。ただ熱狂的なまでの好色者でしかないと思われる。儒教の伝統思想はこんな人物の意識の中にまで浸透していた。当時の人々の意識の中に儒教の伝統がいかに強いかがわかるであろう。

また、『金瓶梅』の十八回の中で、李瓶児と蔣竹山の結婚にたいして、孟玉楼は次のように言っている。[15]

だいたい亭主が死んでからいくらも時がたたず、喪もまだ明けないうちに、人のところへかたづくのがよくないわ。

ここで、孟玉楼はやはり儒教の婦徳によって、李瓶児の行動を批判した。また、この婦徳に違反する社会現象に対して、呉月娘の批判はもっとも激しいと思う。彼女は孟玉楼のあとについて、次のように言っている。[16]

時がどうのこうのといったって、亭主の喪が明けないうちに、

ふらふらと人のところへかたづいたのは、一人だけしかしらねえ。あのすべたのように、一日じゅう男といっしょに酒の中で眠って酒の中でころぶ人が、貞操なんぞ守るもんですか。

孟玉楼と潘金蓮は二人とも喪の明けないうちに再婚した。これも明代に普通の社会現象である。しかし、孟玉楼の意識の中には、儒教の婦徳もまだ残されていた。

また、「呉月娘は毎月三度、お精進をし、七の日になると、香を焚いて星をおがみ、夜更け天に向かって祈りを捧げ、どうぞ夫を助けてあの人が一日も速く心をいれかえて家のめんどうをみてくれるように、また早く男の子を生んで一生の見込を立てることができるようにと、お願いしてるのです」[17]。これも儒教の「不孝に三あり、後無きを大と為す」[18]の影響と考えられる。また、この祈祷の儀式は仏教のものと思われる。書中には、多くの場面で、呉月娘は家で定期的に尼僧から説経を聞くことが描かれている。おそらくこの仏教経典の講釈を聞くということは、当時の富家の婦人の生活内容の一部であろう。馮夢龍の「三言」、凌濛初の「二拍」の中でもそのような場面が多い。当時、仏教の影響も相当な勢力を持つと思われる。

また、書中の人物はときどきに仏教の因果応報の思想の議論をしている。例えば、第九十一回の中に、町中の人々は孟玉楼が嫁にいくの様子をみて、次のように議論している[19]。

見ろ、西門慶の家の、三番目の妾が、嫁にゆくんだぜ。あの野郎生きてた時は、むちゃなことばかりやらかし、欲ばりで助平で、人の女房までたらしこみやがったから、さて死んでしまうと、女房どもが、嫁にいったり、持ち逃げしたり、まおとこしたり、泥棒したり、それこそ雉の毛みたいに、根こそぎむしり取られちゃったじゃないか。三十年目の報い、なんてことわざにはいうが、もう目の前に報いが来てるよ。

ここで、町中の人々が、孟玉楼が嫁にいくのは、西門慶が生きている時に、人の妻に手をだして、悪いことばかりした報いだと議論している。これは必ずしも作者の作り話ではないと思われる。

『金瓶梅』の人物の描写について、後の学者はこの真実性に対して高い評価を与えた。鄭振鐸は「談『金瓶梅詞話』」の中で次のように指摘している[20]。

本当の中国社会の諸相を表現したものは『金瓶梅』のほかには見いだしえない。

また、劉大傑は『中国文学発展史』の中で、次のように論述している[21]。

西門慶は『金瓶梅』という本の中で死んだ。しかし、彼は旧社会の中ではまだ死んでない。彼だけではなく、およそ彼の周りの人間が皆まだ死んでない。……『金瓶梅』の価値はあ

の暗い社会の真実の内部景色を描いて、われわれに見せたことにある。

ここで、鄭振鐸と劉大傑は、『金瓶梅』の人物の描写の真実性が非常に高いということを指摘した。『金瓶梅』の人物の行動から言論まで現実社会の人間とまるでそっくりである。この事実によれば、『金瓶梅』の儒教と仏教の伝統道徳思想は必ずしも作者の主観的な考えとは言えないであろう。

上述のように、『金瓶梅』の書中の登場人物の行動と言論も相当に儒教と仏教の伝統道徳思想の影響を受けている。しかし、これは作者が意識して強調するものではなく、作者がただ忠実にこの時代の庶民の生活を再現したことによると考えられる。

四、書中にみえる作者の評語について

『金瓶梅』の中には、作者自身の意見が非常に多いといわれる。作者は儒教と仏教の伝統道徳思想の指導のもとで、書中人物の非礼の行動と言論を批判したという。これは一部の学者の考えである。

この章では、主にこの作者自身の意見を考察したい。

確かに、『金瓶梅』の作者は、書中に発生した事件に対して、さまざまな評論を下した。しかし、これは『金瓶梅』だけの現象ではない。明代の小説はほとんどそうである。たとえば、『金瓶梅』の作者の直接的な評論はほとんど詩、詞、諺などの形式で表現された。諺は元代と明代の戯曲、長編と短編小説の中にもよくあらわれる。また、この形式は『金瓶梅』前後の話本小説などの文学作品の中にもよく使われた。例えば、『金瓶梅』の第七十五回の中で、回頭の詩の後に、作者は「善には善報があり、悪には悪報がある」の諺が引用された。この諺は元代の無名氏の『来生債・一折』、明代の馮夢龍の『醒世恒言』の三十三回、徐元の『八義記』、また『西湖二集』の巻五が引用されている。[22]

また、『金瓶梅』の第三十三回の冒頭詩は、西門慶の好運（男の子を生まれ、官職を手に入れたこと）に対して、次のように評論している。[23]

身の行くすえはわからぬが、立身出世は求めまい、金銀財宝積んだとて、運賦天賦にゃかなわない。

八十八回に、春梅の幸運について、作者は次の詩で評論している。[24]

昔仕えた主なれど、いまはおさらば別の主、よろず前世の定めごと、あくせくするのも無理はない。

九十八回に、次回の陳経済の死に対して、作者は次のように評論している。[25]

――皆さん、お聞きください。このとき、陸秉義がこんなことを言い出したばっかりに、一人の人間を非業に死なせること

になり陳経済がまことに苦しい、まことにむごい最後を遂げることになるわけで、正に、「すべて前世の約束こと、ちょっとも人のせいじゃない」というところです。――

これらの詩の内容は「生死は命により、富貴は天にある」という諺の思想と一致している。この諺「生死は命にあり、富貴は天に在る」とは『論語』の「顔淵篇」にみえることば。これは孔子の論述である。しかし、元代、明代に至っては、もうすでに庶民の諺になった。この現象から見れば、書中の作者のこれらの議論はただ庶民意識の反映にすぎないと考えられる。つまり、明代の知識人は普通の庶民たちと同じく欲望を追求する進歩思想を持つが、一方では、伝統的なものを捨てることはなかなかできなかった。この現象は当時の人から見れば、不思議ではないと思われる。

ここで、一例をあげたい。これは明代の文人の『金瓶梅』の刊行についての話である。沈徳符（一五七八～一六四二）の『万暦野獲編』巻二十五にある『金瓶梅』の条である。[26]

……蘇州の友人馮猶龍がそれ（『金瓶梅』の写本）を見て驚喜し、書坊に高い値段で買い取って刊行するように勧めた。馬仲良はその時滸墅関の徴税官であって、やはり私に書店の求めに応じて、人々の饑をいやすようにと勧めた。私は「こうした書物はきっとだれかが出版するでしょう。しかし一度出版されて家々に伝わると、人の心をだめにするでしょう。将来、閻魔様がその禍の始めを追求したら、私は申し開きができなくなってしまいます。私は出版によって地獄に落ちるわけにはまいりません」。仲良は「その通りだ」といったので、そのまま篋底にひめておいた。いくらもしないうちに、蘇州ではそれを国門に懸けた（『金瓶梅』が出版された）のである。

ここで、馮夢龍は沈徳符が袁中道のもとで手にいれた『金瓶梅』の写本を読んで感動し、それを書店に高い値段で買い取って出版するように勧めた。しかし、沈徳符がもしこの本が出版されたら、社会の気風がさらに乱れることを恐れている。この責任を取らなければならないかも知れない。沈徳符は儒教と仏教の道徳思想の影響を受けて、このことを心配している。これは明代の文人の真実の心理を表現していると考えられる。

また、荒木猛とパトリック・ハンナンの研究によると、『金瓶梅』の作者は『金瓶梅』の中で『水滸伝』の外に、口語の短篇小説（話本小説）や、戯曲・俗曲等を素材として駆使しているということが明らかになっている。[27] したがって、『金瓶梅』の作者の批評も個別的な現象ではなく、明代の通俗文学作品の一つの特徴であったといえよう。

また、当時の庶民からみれば、作者の評語の中に儒仏両教の伝統道徳思想があらわれるということも、不自然なことではないであろう。当時、これらの詩、詞、諺などが通俗文学作品の中によくあらわれている。庶民たちもなれてきた。実際、これらの説教はもうすでに庶民たちの日常茶飯事の一部になってしまった。

これまでみてきたように、『金瓶梅』の中の作者の評語は、全体としていえば、元代、明代の長編・短編小説、戯曲などの文学作品の中の作者の評語と全く同質のものであろう。これによって、『金瓶梅』の作者の評語は、明代の通俗文学作品の一つの特徴であったといえよう。

五、伝統思想と「真性情」

『金瓶梅』の中で、前に述べたように、従来の儒教、仏教の伝統思想による表現と説教が多い。これも、明代の通俗文学作品の一つの特徴であったといえよう。明代の知識人は、庶民の自由な生き方にあこがれている。また、庶民の文芸であった小説・戯曲・歌謡を喜び求めた。これは明代の知識人が人間の「真性情」、つまり人間の本音を求めるという思潮と一致しているといえよう。次にこの点についても考えておきたい。

まず、注目したいのは、『金瓶梅』の中で、描写された人物の「真性情」である。書中の人物はまるで当時の庶民たちの反映であろう。これは当時の知識人の求める現実生活の「真性情」と思われる。ここで、『金瓶梅』以外の、一例をあげたい。明末の文学者の袁中道は「回君伝」という文章の中で、自分は若いころ書中の人物、回君と親しく付き合い、酒を飲み歩いていた。それを人々がとがめたのに対し、次のように答える。[38]

君達などは、ともに飲むに足りぬ。君達の飲み方を見ると、心はほかに考えごとをしているようだ。目はなにかを見つめているようだ。手に杯を持っていても、心はよそに行っている。無理にちょっと笑ったかと思うと、もう難しい顔をしている。身にはいつも大事を抱えているかのようで、すぐに帰ってしまう。たまにちょっと酔うことがあっても、無理に自重して、黙り込んでしまう。

いったい人生は、つらいことばかりである。楽しいといえるのは杯をとった一時ぐらいなもの。…

だが、回はちがう。酒が飲みたいと思っていて、酒が目の前に現れると、あたかも病に薬を得たかのよう…。耳目は一箇所に集中し、心も一所に集まり、酒以外のものはまったく知らず、満足そうに、嬉しそうに、同じ言葉を繰りかえし、様子はめちゃくちゃ、口元はニヤニヤしまらないが、全身これ

喜びの気が満ち満ちている。この人と一緒に飲んでいると、大いに楽しくなってくるのだ。だからわたしは毎日でもこの人と飲むことを望む。

この回君は酒を飲み、ばくちを打ち、女遊びに明け暮れる人物である。しかし、袁中道はこの回君の酒の飲みっぷりに憧れを抱き続ける。このお酒を飲む楽しさを追求することは『金瓶梅』の中の情欲を追求することと同じものであろう。これは明代の知識人が生活の「真性情」を追求するともいえよう。この庶民の生き方への憧れは当時の知識人に共通する精神風景だったのではなかろうか。

「真性情」を追求すると同時に、明代の知識人は庶民の道徳教化と勧善懲悪をも強調した。これは当時の小説の中にもよく現れている。前にも述べたように『金瓶梅』の中には大量の説教がある。『金瓶梅』の崇禎本の東呉弄珠客の序の中で、『金瓶梅』は世を戒めるために書かれた書物だと述べられているのである。また、『金瓶梅』後の馮夢龍の「三言」は、それぞれの書名が『喩世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』であって、「世を喩す」、「世を警める」、「世を醒ます」といった教化意識が表に出ている。その小説の中でも、『金瓶梅』と同じように、儒教と仏教の伝統道徳意識によって、書中の人物の行動、言論などにたいして、批評された。

明の中葉以降、社会の秩序は非常に混乱した。知識人の多くが危機意識を持って、庶民の道徳教化と勧善懲悪を強調したのは、知識人の「真性情」の一つの表現と考えられる。

『金瓶梅』の中にも、これらの「真性情」が含まれたと思われる。この点について、魯迅は『中国小説史略』の中で、次のように述べている。[8]

作者は当時の人間生活を知り尽くし、その筆は暢達であるとともに微細であり、容赦なく暴露するとともに含蓄豊かに暗示し、あるいは二つの異なる局面を対照的に描くなど、変幻のさまが随所に見られる。同時代の小説でこれ以上のものはない。…

この作品を書いたのは、もっぱら市井の淫蕩な男女を写すためだったというのは、内容と一致しない意見である。なぜなら、西門慶は旧家の出であり、官吏になり、上流階級とつきあったばかりでなく、知識人とも往来した。だから、この一家について書けば諸方面を罵倒することができる。下層社会の言行を描いて、筆伐を加えたというだけのものではない。

ここで、魯迅は主に『金瓶梅』は当時の人間生活を真実に表現したと同時に、この社会に対しての批判もあるということを指摘した。この社会に対しての批判も明代の知識人が「真性情」を求める一側面である。『金瓶梅』の作者は人間の本音、生活の中の「真性情」

を追求すると同時に、儒者として、「身を脩め、家を斉へ、国を治め、天下を平らかにす」る責任を忘れず、『金瓶梅』の中においても、儒教と仏教の伝統道徳思想をも強調した。これは儒者としての「真性情」を十分に発揮したといえる。

人間の本性にあわせながら儒教と仏教の伝統道徳思想にもとづいた教化性、あるいは個人の「情」と社会の「理」、この両者が自然に調和し共存しているところに、『金瓶梅』の作品の意義と魅力があると思われる。

六、おわりに

『金瓶梅』の中では、確かに欲望を追求するという進歩思想と儒教、仏教の伝統道徳思想が同時に存在している。しかし、これは作者の自身の困惑と矛盾とは考えられないであろう。『金瓶梅』が生まれた明代の社会思潮、時代の気風は大きな変化があった。『金瓶梅』はこの社会思潮の影響のもとで生まれた。『金瓶梅』の存在は個別的な現象ではなく、一種の文学現象の反映と考えられる。『金瓶梅』の登場人物の描写は、忠実にあの時代の庶民達の風貌を再現した。作者の評語の思想内容は、元代、明代の戯曲、長編・短編小説などの通俗文学作品の中にもよく現れてくるものである。また、荒木猛氏等の研究成果によると、『金瓶梅』の作者は元代、明代の長編小説、短編小説、戯曲、俗曲などを素材として採用しているということも明らかになっている。『金瓶梅』における評語は、作者自身の意識だけでなく、この時代の一種の文学思想を代表することもできると考えられる。また、明の知識人は「真性情」を追求することに熱中している。この「真性情」の中には庶民の生き方への憧れ（欲望を追求すること）と儒仏両教の伝統道徳思想を守ることの両様のものが含まれている。この「真性情」を求める明の文人たちは庶民の文芸に関心をもち、庶民の生活や考え方にも十分に共感を示した。これは明代の知識人に共通する精神風景と思われる。『金瓶梅』の作者も明代の知識人の一人として、『金瓶梅』の中で、庶民の心理への興味と儒仏両教の伝統道徳思想に基づいた教戒性を自然に調和させ、共存させていると考えられる。

注

1　宋克夫「人欲的正視和人欲的困惑」（『湖北大学学報』一九九二年第五期）原文：『金瓶梅』産生的の明代中葉、随着商品経済的発展人們的価値観念発生了深刻的変革。作為時代風尚的体現、対金銭財富的追求、繁華生活的享受和人情色欲的放縦構成了人們的人生価値取向。『金瓶梅』的作者一方面客観地表現了這些新的価値取向対伝統価値体系的衝撃、同時又希望以倫理意識、宗教意

識和生命意識匡正世風、而最終陥于矛盾与困惑的境地。

2　支沖「『金瓶梅』評価新議」『金瓶梅研究』（復旦大学出版社一九八四年十二月）pp56～57。原文：表現之一是全書貫串了因果輪廻的小乗思想。……将一切圧迫、剥削、謀殺的冤仇帰手宿命、以仏法解消。這是符合反動統治的宗教鴉片、也是書中重要的思想毒素。

3　王守仁「伝習録」下、『王陽明全集』（香港広智書局、一九五三年三月）原文：良知只是個是非之心。

4　吉川幸次郎述・黒川洋一編『中国文学史』（岩波書店、昭和四十九年十月）p367。

5　李卓吾「答鄧明府書」李贄『李氏焚書・続焚書』（中央出版社、一九七一年二月）p.43。原文：無一邇言而非真聖人之言、天下無一人而不是真聖人之人明矣。…就此百姓日用処提撕一番、如好貨、如好色、如勤学、如進取、如多積金宝、如多買田宅、為子孫謀、博采風水為児孫福蔭。

6　李卓吾「答鄧石陽書」前掲注5、p384。原文：穿衣喫飯、即是人倫物理。除却穿衣喫飯、無倫理矣。世間種種皆衣与飯類耳。

7　『論語』「子罕第九」『四部備要』（中華書局）。原文：出則事公卿、入則事父兄。

8　『礼記』「大学篇」『四部備要』（中華書局）。原文：脩身、斉家、治国、平天下。

9　張岱「自為墓誌銘」原文：蜀人張岱、陶庵其号也。少為紈袴子弟、極愛繁華。好精舎、好美人、好変童、好鮮衣、好美食、好華燈、好煙火、好梨園、好鼓吹、好古董、好花鳥、兼以茶淫酒虐…。

10　袁宏道「龔惟長先生」『袁中郎全集』（中国文学名著第六集）（世界書局、中華民国五十三年二月）。原文：自極世間之色、耳極世間之聲…。一快楽也。…士有此一者、生可無愧、死可不朽矣。

11　張翰『松窓夢語』。原文：世俗以縦欲為尚、人情以放蕩為快。

12　小野忍・千田九一訳『金瓶梅』（『中国古典文学全集』）（平凡社、昭和三十六年二月）

13　注10に同じ。

14　注12に同じ。

15　注12に同じ。

16　注12に同じ。

17　注12に同じ。

18　『孟子』「離婁上」『四部備要』（中華書局）。原文：不孝有三、無後為大。

19　注12に同じ。

20　鄭振鐸「談『金瓶梅詞話』」（『文学』第一巻第一期、一九三三年七月）原文：表現真実的中国社会的形々色々者、舎『金瓶梅』

恐怕找不到更重要的一部小説了。

21 劉大傑『中国文学発展史』下（中華書局、一九六三年七月）p1062。原文：西門慶在『金瓶梅』這部書里是死了、但在旧社会中並没有死；不僅他、凡圍繞着他的那些人物、都没有死。…『金瓶梅』的價値、便在于它能夠把那一個黒暗社会的真実内形描絵給我們看。

22 傅憎亨・楊愛群「『金瓶梅』俗言求因」（『中国潘陽社会科学輯刊』、一九九三年第四期）を参照されたい。

23、24、25、注12に同じ。

26 沈德符『万暦野獲編』。原文：呉友馮猶龍見之驚喜、慫恿書坊以重價購刻。馬仲良時権呉関、亦勧余応梓人之求、可以療飢。余白：「此等書必遂有人板行、但一出則家伝戸到、壊人心術。他日閻羅究詰始禍、何詞以対？吾豈以刀博泥犂哉。」仲良大以為然。遂固篋之。未幾時而呉中懸之国門矣。

27 P.D.Hanan 原著、荒木猛訳「金瓶梅の素材」（『長崎大学教養部紀要』人文科学篇第三十五巻 第一号、一九九四年）と荒木猛「話本と『金瓶梅』」（『長崎大学教養部紀要』人文科学篇第三十巻第二号、一九九〇年）を参照されたい。

28 入矢義高訳注『明代詩文選』『中国詩文選』二三（筑摩書房）

29 魯迅『中国小説史略』（『魯迅全集』人民文学出版社、一九五七年）原文：作者之於世情、蓋誠極洞達、凡所形容、或條暢、或曲折、或刻露而尽相、或幽伏而含譏、或一時並写両面、使之相形、変幻之情、随在顯見、同時説部、無以至上。……至謂此書之作、専以写市井間淫夫蕩婦、則与本文殊不符。縁西門慶故称世家、為搢紳、不惟交通権貴、即士類亦与周旋、著此一家、即罵尽諸色、蓋非独描摹下流言行、加以筆伐而已。

（Gu Chun Fang 中国語講師）